平成２８年度卒業式　学長式辞

愛媛大学長　大橋　裕一

太陽の日差しが日に日に温かくなり、五分咲きの桜にも春の訪れを感じさせる時候となりました。

ただいま、１，８６４名の皆さまに学位記を授与させていただきました。このたび、ご卒業される皆さまに、心からのお祝いを申し上げます。ご卒業おめでとうございます。

また、本式典にご出席されているご家族の皆さま、そして関係の皆様方にお慶びを申し上げますとともに、本学に対する日頃からのご理解・ご支援に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、本日の式典には愛媛県の各界を代表する方々、愛媛大学経営協議会の委員の方々、そして愛媛大学にゆかりの深い先輩諸氏に来賓としてご臨席を賜っております。ご多用の中をご参列いただき、まことにありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。

平成 24 年、愛媛大学は「本学の学生が卒業時に身につけていることが期待される能力」として「愛大学生コンピテンシー」を制定し、爾来、学生教育の重要な指針としています。この「コンピテンシー」は、「知識・技能」、「論理的思考力」、「コミュニケーション力」、「自立力」、「協働力」の５つの能力から成り、いわゆる社会人基礎力にも通ずるものです。

近年、文部科学省は「これからの社会に必要な人材」の育成を目指した「高大接続システム改革」の中核に、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、そして「主体性・多様性・協働性」という「学力の３要素」を据えましたが、「愛大コンピテンシー」はまさにその先取りなのです。卒業生の皆さまはどうか自信を持ってお進みください。

近年、様々な分野におけるグローバル化への反動からか、大国を中心に「自国第一主義」を掲げる新たなナショナリズムの台頭が見られます。米国でのトランプ大統領の当選、イギリスの EU 離脱などはその象徴的な現象でしょう。大義名分は国際協調よりも国益追求であり、消えていたボーダーが復活するのか、今後の社会動向はいたって不透明、流動的です。

そのような中、荒海へと乗り出される皆さまに一体何が必要なのでしょうか？昨年度、私は、愛大コンピテンシーにプラスすべき「６つ目の能力」として、「俯瞰力：大きな視点から物事を冷静に見つめる能力」の必要性をお話させていただきました。今回は、眼科医であることにちなみ、「7 つ目の能力」としての「両眼視」の重要性についてお話いたします。

大昔、われわれヒトの祖先は、天敵から逃れ果実を食するために樹上で生活することを選択しました。結果として、木々の間を飛び回ることが必要となり、これに適応する

ために、ものの遠近感を掴みやすい方向へと目と脳の構造は進化していきました。

鳥以下の下等動物では目は顔の横についていて、右目の神経は左の脳へ、左目の神経は右の脳へと完全交叉しています。このため、両眼の視野の重なりはありませんが、その代わりに 360 度に及ぶパノラマビュー（俯瞰力ですね！）を獲得し、天敵の襲撃に備えています。

他方、ヒトでは目は顔の前方についていて、左右の目の視野が 124 度にわたって重なっています。ただ、同じ視野を見ている場合でも、左右の目の角度に違いがあるため、その映像はまったく同じものではなく、実際には「2 つの映像」が得られています。実際、われわれが左右の目で、「異なった映像」を見ていることは簡単に確認できます。正面に指を一本立て、それを左右の目で交互に見比べてみてください。指の位置が少し移動して見えるはずです。

この「2 つの異なった映像」は脳の持つ「両眼視機能」の働きによって処理され、「立体感」や「遠近感」を持った「1 つの映像」へと変換されます。これがヒトを含む哺乳類が獲得した「立体視」と呼ばれる高次の視機能です。このように「視差」と呼ばれる左右の目の視線の違いによって立体視が生みだされ、奥行きを持った質の高い見え方を享受できるのです。

ヒトは視野の広さ（俯瞰力）を半分以上捨て去り、この立体視を選択しました。この機能が如何に優れたものであったかについては、その後の人類の隆盛の歴史が雄弁に語っているのではないかと思います。

このような形で、一つのものを違う角度から眺め、評価することは、物事を的確に判断していく上でとても重要です。物事には、「楽観主義」と「悲観主義」とか、「保守」と「革新」とか、「ホット（情熱）」と「クール（冷静）」といった二面性が必ず存在ありますが、誰の頭の中にもこれに対応した対立センサーが備わっているのです。実際には、そのバランスの中で様々な判断を下しているのですが、言い換えれば、このバランスの差が人間の個性ということでしょう。

こうした対立軸の中に「道理」と「利益」があります。人間の行動モラルが道理の「理」、物事の筋道であり、他方、人間界にある最大の誘惑、思考バイアスの源が利益の「利」です。「利」を求めるあまり、人間は血迷いモラルを失うことさえあります。利益の「利」で道理の「理」を覆い隠そうとしても、うまく行くのは一時的であり、早晩崩壊することは歴史が証明しています。そうとは知りつつも、人間は都合のいい「理屈」を考え出し、自己の「利益」を優先してしまいがちです。

道理の理、利益の利、この二つの「り」センサーは皆さまの中にも存在しています。私の好きな吉田松陰の言葉に、「君子は、何事に臨んでも、それが道理に合っているか否かと考えて、その上で行動する。小人（しょうじん）は、何事に臨んでも、それが利益になるか否かと考えて、その上で行動する。」とあります。皆さまには、是非、「理」が「利」を制する質の高い人生を歩まれてください。

最後になりましたが、愛大コンピテンシーを身につけて卒業されていく皆さまが、それぞれの分野で素晴らしい成果をあげられることを心より期待し、はなむけの言葉といたします。